



データ活用の時代を見据えて、経営基盤をIBM z14でさらに強化 日本生命が最新メインフレームIBM z14をいち早く導入

日本生命は2017年10月、IBMの最新メインフレーム「IBM z14」の導入を決定した。国内金融・保険業界でのz14採用は初めて。「人生100年時代をリードする日本生命グループに成る」を標榜し、データ活用の時代を見据えて成長戦略を支える経営基盤を強化する同社は、ITで何を目指し、メインフレームに何を期待して最新機種を導入したのか。z14の導入を推進した同社のシステム担当者に聞いた。

セキュリティー機能の高さが最新メインフレームの魅力に

低金利や少子高齢化などにより、金融・保険業界の経営環境は厳しさを増している。業界大手の日本生命にとってもその状況は変わらない。こうしたなかで同社は「超低金利下での収益性向上」「日本生命グループの社会的役割の拡大」「グループ事業の着実な収益拡大」という3つの成長戦略を掲げる。

これまでも同社は、ITを「成長戦略を支える経営基盤」と位置付けてきた。「当社の強みは5万人の営業職員がいることです」と、システム企画部 システム企画課長の前田泰成氏は話す。その活動を支援するのがITであり、インターネットの活用やシステム連携が図られてきた。AI（人工知能）や、金融とITを融合したフィンテックなど、最先端技術を活用するための全社横断のワーキンググループもある。

一方、事務処理の分野におけるITの自動化にも取り組み、業務の効率化を積極的に推進してきた。その中心となるのが、長期にわたる保険契約を管理する基幹業務

システムだ。システムのコアとなる最も大きく重要なシステムで、一貫してメインフレームが使われてきた。ここ15年は主にIBMのメインフレームが活用されている。



日本生命保険相互会社
システム企画部 システム企画課長
前田 泰成氏

同社がIBM製品を利用するようになったのは、約90年前の1928年に遡る。紙に穴を開けて情報を記録するパンチカードの時代で、日本では初期ユーザーの1社だ。

「堅牢性に優れるIBMのメインフレームへの信頼度は高く、基幹システムには最適。しかも最近ではオープンな技術にも対応し、将来性も広がっています」(前田氏)

長年IBMのメインフレームを活用してきた会社にとって、最新機種であるz14はどう映ったのだろうか。システム企画部 課長補佐の藤牧正浩氏は「z14の魅力はセキュリティー機能の高さです。これを導入することが、将来的にも当社にとって強みになると直感しました」と話す。

藤牧氏が指摘するセキュリティー機能とは、z14で初めて採用された「全方位型暗号化」というアプローチだ。メインフレーム上のアプリケーションのデータを丸ごと暗号化してしまうもので、セキュリティー対策の常識を根本から覆す。



日本生命保険相互会社
システム企画部 課長補佐
藤牧 正浩氏

データ活用を加速させる全方位型暗号化のアプローチ

生命保険という極めて高い安全性が求められる個人情報扱う日本生命にとって、セキュリティーは最も重視するシステム要件だ。これまでもセキュリティー対策には常に配慮し、個人情報保護法やマイナンバーへの対応も率先して進めてきた。

しかし、情報セキュリティーのリスクは日々増大している。藤牧氏は「世の中のセキュリティー水準は日々高まっています。それをキャッチアップし続けなければなりません」と対策の難しさを語る。

そんな会社にとって、セキュリティー機能を抜本的に強化したz14の登場は朗報だった。前田氏は「これまではソフトウェアでデータを暗号化してきました。

しかし、レスポンスやリアルタイム性を考えると限界があります。z14はハードウェアで暗号化してくれるので安心です。セキュリティーに対処していることは信頼獲得にもつながりますし、将来的には活用を検討していきたいと考えています」と語る。

z14では専用の暗号化機構が提供され、その並外れた性能を生かしアプリケーションデータの全てを暗号化することが可能だ。「OSレベルで暗号化する」と考えるとわかりやすい。暗号を解くためのカギもハードウェア上に保管され、違法にデータが持ち出されようとするとも自動的にカギを消滅させてしまう仕組みを持つ。

こうしたハードウェア側での暗号化は、アプリケーション

を開発・運用するうえでのセキュリティー対策の負荷を軽減し、システムを攻撃する側にとってのデータの価値をゼロにする。暗号化されて解読できないデータは狙う意味がないからだ。

藤牧氏は「z14の暗号化機能がグローバルなセキュリティー水準*をクリアしていることもメリットが大きい」と語る。グローバルにビジネスを展開する会社にとって、海外で要求されるセキュリティーレベルにハードウェアで対応できれば対策もとりやすい。

EU(欧州連合)では、2016年4月にGDPR(EU一般データ保護規則)という新しい個人情報保護の法律が制定された。この法律では、データが暗号化されていない状態で個人情報が漏洩した場合、該当する個人に通知するとともに、漏洩の事実を公表しなければならない。全てのデータが暗号化できるz14であれば、こうした法規制に対して特別な対策を講じる必要がない。

※グローバルなセキュリティー水準：連邦情報処理標準(FIPS)レベル4標準

メインフレームデータの活用がビジネスの将来展開を支える

今、多くの企業はクラウドをいかに活用するかを検討している。日本生命も例外ではない。では、メインフレームをどう位置づけているのだろうか。前田氏は「今後ますます、クラウドがサービス基盤として活用されるでしょう。一方、当社では最も重要な契約情報はメインフレームにあり、オンプレミスがなくなることはありません。それをどう使い分けるかを考える必要があります」と語る。

同社が保有する顧客情報は約1,200万件に上る。そこには健康情報なども含まれる。これらのデータを分析、活用できれば、大きなビジネスチャンスにつながる。もちろん、プライバシー保護とセキュリティーの確保は必須条件だが、z14にはそれを可能にする潜在能力がある。

「z14には外部のシステムと連携するためのAPI(Application Programming Interface)が用意されています。基幹システムとクラウドのシステムをつなぐための準備はできています。メインフレーム上にある重要なデータを外部に持ち出すことなく、セキュリティーを確保しながらデータをリアルタイムに活用できるという考え

方は魅力的です」と、システム企画部 課長補佐の溝内伸悟氏は話す。



日本生命保険相互会社
システム企画部 課長補佐
溝内 伸悟氏

一方、重要なデータをクラウドに置く場合は、コスト面も含めて慎重に議論すべきだろう。溝内氏は「マスターデータをクラウドに置けば、そこに重力が発生してクラウド



シフトが進みます。データの移動にはコストもかかり、セキュリティ面も懸念されます。近年のクラウドシフトの流れにとらわれず、重要データをメインフレームに残し、ハブを使って利活用することも含めてさまざまな観点で検討していくことが肝要であると考えます」と指摘する。

同社にとって、保有するデータをどう活用していくかは大きな経営課題だ。前田氏は「次のキーワードは“分析”と考えています。そこではAIが重要な役割を果たすことになるでしょう。z14にはAI機能の装備も可能です。IBMには、AI、フィンテック、クラウドの全てをトータルでサポートしてくれることを期待しています」と語る。「メイン

フレームでデータ分析できることは大変魅力的です。重要な基幹データをコピーしなくてもよく、メインフレーム内外にある大量のデータを鮮度の高いままパワフルな処理で分析して即時に業務処理に組み込むことができ、さまざまなビジネス活用が見込めます」と溝内氏も強調する。

圧倒的な処理性能と、全方位型暗号化というハードウェアレベルでの高いセキュリティ機能を有し、外部システムと連携するAPIやデータ分析のためのAIといった最先端テクノロジーが利用できるz14が、日本生命のビジネスをどう支えていくのか。今後の展開が注目される。

お問い合わせ

IBM アクセスセンター

☎ 0120-550-210

受付時間 9:00～17:00 (土、日、祝日を除く)

ソリューション情報

「IBM Z」で検索

https://ibm.biz/z_mainframe_jp



ここに掲載のコンテンツは、日本経済新聞 電子版で2017年11月～12月に掲載した広告特集「日本生命が最新メインフレーム IBM z14をいち早く導入」の転載です。



日本アイ・ビー・エム株式会社

IBM、IBMロゴ、ibm.com、およびIBM Zは、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corporationの商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。

現時点でのIBMの商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml (US)をご覧ください。

©Copyright IBM Japan, Ltd. 2018 日本アイ・ビー・エム株式会社 〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町 19-21

Printed in Japan January 2018 All Rights Reserved